

# The Sense of Existence Disappearing in Becoming Past

## — Temporal Perspectives on Graham Swift's Novels

Satoshi Masamune

### Abstract

Whether tense determinations (present, past, future) belong to us or whether they are intrinsic features of reality has been long argued among philosophers. It could be said that we will understand the matter better if we try to regard this problem, not as a linguistic issue, but as an ontological one.

Tenseless theorists, although they admit that we cannot remove tenses from our language, argue that tense is something which we create and which is dependent only on us, just showing how the one who utters a tense statement is personally related to the world.

The British novelist, Graham Swift (1949-) has written novels where the protagonists are seeking the several kinds of senses of existence. Not only are the protagonists sceptical about their surroundings (especially, in terms of their spatiality), but they also doubt whether what happened really happened and continues to have an existence in the present. They sometimes find it hard to assure themselves of such a sense of existence, even thinking that those past events were just illusions.

In Swift's major work, *Waterland* (1983), the hero, grammar school history teacher, Tom Crick, relates to his students what happened to his ancestors, by using tenseless terms which he initially believes could provide him with speaker-independent, objective, truths. His attempts, however, end up being a failure because such descriptions can only give him a certain emptiness of the past reality, as if they were a list of items just ranging in order.

From all this, Tom realizes that the other category of description, namely, tense description, is indispensable in order to obtain for him a sense of the existence of the past. But for all the awareness of this, he is aware that even the tense uses do not enable him to obtain what he wants. He insinuates that the event will lose something when it passes from the realm of the present to that of the past.

This paper will analyze why Tom's attempts are infeasible, focusing on that which the event will lose in the process of becoming past. I will examine what is lost during the process by introducing the notion of 'the open future' which I define as the future not fixed.

# 失われていく実在感覚

## — Graham Swift の小説の時間論的考察

正 宗 聡

はじめに

Present, past, futureという時制概念が、われわれの側のものなのか、それとも客観的的属性として世界（あるいは出来事）の側にあるのかという問いは古くからある。これはいわゆる「時制論」対「無時制論」の論争につながる問題であり、そしてこれは、言語についての論争というよりはむしろ存在論についての論争といった方が正しく理解される。

無時制論者は、時制がわれわれの言語から取り除けない特徴であることは認めながらも、時制概念が発話者と出来事との私的関係を示すのにすぎないとして時制を世界の側の特徴とは考えない。

英国の現代作家 Graham Swift (1949-) の小説においては登場人物たちの実在への懐疑が大きな問題になっている。外界—特に空間—についての懐疑はこの作家の登場人物たちに顕著に見られるが、これと並んで、過ぎ去った出来事の実在性についての懐疑も大きな問題である。過ぎ去った出来事を想起しても、それが幻の出来事だったのかもしれないと思われるほど、出来事の実在感覚が得られない。

Swift の代表作 *Waterland* (1983) においては、過去に過ぎ去った出来事の実在性を現在でも確かめられるように、speaker-independent な描写であると思われがちな無時制描写で主人公はとりあえず過去を表現しようとする。ところが無時制描写は、出来事群の箇条書的で空虚な世界しか構成しないことが判明する。

このことから主人公は出来事の実在性とは、無時制によっては表現できないものだと考えつつ、しかし同時にそれは時制を用いてもなお、表現することが不可能であると認識している。

本論はこの不可能な事態が、何に起因しているのかを「時制論」対「無時制

論」の議論との関係で考察したものである。

## 1. McTaggart と二つの系列概念、そして「新たな A 系列」

J. McTaggart によれば、出来事の時間的な様相について、単一の出来事を、時制概念 (present, past, future) によって表していく A 系列と、単一出来事についてではなく、二つの出来事間に成立する前後関係によってつくる B 系列とがある。ある出来事 E があった場合、E is present (or past or future). という表記が前者であり、二つの出来事  $E_1$ 、 $E_2$  を比較して、 $E_1$  is earlier than  $E_2$ . というのが後者の表記である。

A 系列の文の真理値はその文の token によって変化するのに対して、B 系列の文の真理値は token によって変化しないということもよく指摘される。前者の真理値の変化がわれわれのいう時間なのであり、それに対して、後者から得られる時間は静的なもの、スピノザのいうところでは、超越的にふ瞰できる対象としての時間ということになる。

McTaggart は、「時間は変化である」ということをもとに A 系列の方が時間の本質にかかわるとして、A 系列から得られる矛盾から、時間の非実在性を説いた。ある出来事 E の predicate は、A 系列にしたがえば、未来、現在、過去とある。ところでこの 3 つの predicate は互いに相いれないものである。この相いれないものを成り立たせるには、E は異なる時点に相互に相いれない predicate を有するのだ、すなわち、たとえば現在の出来事 E について、

(I) E is present. E was future. E will be past.

といえ、問題ないように見える。(I) は E が現在の時点で現在であり、未来のある時点で過去になり、過去のある時点で未来だったことを意味する。しかしあらゆる時点も、あらゆる出来事同様、過去であり現在であり未来なのだ。時点が相いれない 3 つの predicate を有するためには、さらにメタレベルの時点を設定することになるが、これでは無限背行へと向かってしまう。ゆえに、時制は非現実的なものであり、時間も存在しないと McTaggart はいう。<sup>(1)</sup>

もっともな議論であろうが、McTaggart が (I) で使っている E was future. という部分は、疑問の余地がある。これは少なくとも、E が現実化し過ぎ去って初めて可能となる言述のはずだ。E is present ならば、E was

future といってよいかという疑問が生じる。

David Cockburn は、未来についての命題の真偽の問題について、以下のような結論を出している。<sup>(2)</sup> われわれが未来について真偽を下せる場合というのは、われわれが未来の出来事にコントロールを及ぼせない領域においてである。アリストテレスが言うように、未来の出来事についてわれわれが真偽が下せるということはすなわち、既にその未来の出来事が決まっているということであり、その場合には、未来についてのわれわれの熟考および行動の余地はないのである。未来の出来事についての真偽が現時点で下せない場合をとりあげ、そこにわれわれの考察、行動の自由の余地を見い出す Cockburn の見解は全うである。

ではここでいう、決まっていない未来は未来にあるとってよいのだろうか。われわれは日常、「明日雨が降る (It will rain tomorrow. or It raining is future.)」という際、何のためらいもなく未来形を用い、その不確定の出来事が未来の領域にあるように思う。しかし、決まっていない未来の出来事は未来にあるのではなく、論理的可能性として現在にあるのではないか。

E was future. と造作なく述べていることについて、いわば過去に戻って発言しているこの命題は、その過去の時点で E が論理的可能性としてあったかどうかすら問題としていない点で欠陥があるように思われる。すなわち、その特定の過去の時点において、E が誰の脳裏にも、E is future という可能性としても浮かばなかったとしたら、このような言明は無意味になる。いや意味があつとするならば、それはもはや B 系列的、宿命論的思考をしているのだ。また未来の出来事が論理的可能性として考えられた場合の幻想性について、中島義道氏は以下のように説明している。

われわれはこのように実現した状態から振り返って、実現されていなかった状態を想起こす。そして実現されなかった時 (すなわち過去) において、実現されることになる時 (すなわちその過去における未来) を了解する。つまり、ある過去の時点から見ますと、その後実現されたことはすべてその過去における「未来だった」ことになります。

そして、その過去系列の最先端に「現在」が位置している。現在とはあらゆる過去から見て「未来だった」時でもあるのです。

本当はこれだけなのですが、さらにわれわれはこの関係を完全な不在である未来に延ばし、現在と未来とのあいだに幻想の関係をつくり出してしまう。<sup>(3)</sup>

E was future. という言述そして未来時制一般の考え方の背後に出来事の順序列を土台とするB系列の思考(宿命論的思考)が見え隠れしている。B系列を考えずして、A系列のfutureという概念が可能であるのだろうか。

そこで、B系列的思考法に基づいて未来の出来事を組み入れた「従来型A系列」((I))とは別に、未来の出来事は不在にしておき、現在と過去の相だけからなる、いわば、「新しいA系列」をここで設定してみる。それを図式化すれば任意の現在の出来事Eについて、以下のように、二つの文だけで表現される。

(II) E is present. E will be past.

以上、McTaggartの議論のなかで同意できない点は、決まっていなかった未来の出来事を含めて、未来の出来事全般について、(I)の従来型A系列の考え方をとっていることだ。

## 2. 両系列どうしの依存関係

A系列がB系列に依存していると思われる事象は他にもある。前述のとおり、ある出来事Eが現在(または過去あるいは未来)という属性をもっているというのは、出来事Eのみについての命題であり、一文で表わせることだ。しかし、この種の主張する際には、必ずその発話者の時間的基準点(文の発話者の「現在」)と、述べられている出来事の発生時との比較が前提である。David Mellorは、E is present (or past or future). という文の真理値は、この文のtokenの発生時がそのEの発生時と「同時(または、より後、あるいはより前)」であるということでこの文の真理条件を与えた。過去の文についての真理条件については次のように説明している。

That is, we can say of any utterance of a tensed sentence what must be the case for it to be true in a terminology in which tense does not feature at all.... Now if that is so, then, it is argued, the fact that a certain event is past is not a further fact over and above its occurring (tenselessly) earlier than the assertion that it is past.<sup>(4)</sup>

したがってこの考え方では、A系列も、B系列発想の基本である「同時、前、後」という、二つの「こと」の順序関係に基本づいていることになる。

さらに、一つの出来事について、過去、現在、未来という単純時制を使うばかりでなく、二つの過去の出来事、あるいは二つの未来の出来事ととりあげて、それぞれ、どちらが「より過去であるか」、あるいは「より未来であるか」を述べることを、A系列に含める人がいる。これはMcTaggartが論じていなかった考え方であるが、Richard M.Galeはこの考え方を「不純なA系列」と呼び、A系列を拡張した。<sup>(6)</sup>しかしこの拡張されたA系列は、ほとんどB系列と同じのものではないかという印象をすぐにわれわれはもつ。

一方、B系列がA系列に制限されている点を指摘しよう。B系列において問題となる「より前」、「同時」、「より後」を比較する上で便利なのが、年月日などのスケール (dates) である。1998年は、1996年と比べると「より後」であるし、1998年の5月29日は、1998年の5月30日は、「より前」である。

2つの出来事の前後を比較する際に、既に各出来事に年月日が付されている場合も多い。<sup>(6)</sup>ところで一体いつ年月日が付されるのだろうか？年月日を付す場合、大抵は出来事が起こった発生時を共通の時計といったものに照らし合わせるのだ。ここに「われわれに共通の現在」というものが頭をもたげてくる。その「現在」という時制概念は、個人的なものではなく、公的な、客観的なものである。<sup>(7)</sup>そしてB系列は宿命論的考え方を盛り込まない限り、厳密にはこの「現在」を越えて未来の領域に踏み込んで作ることはいできない。

### 3. 2系列間の還元作業

こうした互いに依存関係にある両系列であるが、しばしば一方を他方へ「還元する」という試みがなされてきた。還元の可能性によって両系列のうち、どちらが優位であるかを検討したのだ。試みた哲学者たちの見解は、二つのグループに分れる。一つは、A系列がB系列へ還元可能である<sup>(8)</sup>ことから、A系列が極めて主観的なものであり、なんら世界の「事実」を描写してないとし、A系列よりもB系列を重んじた。これに対して、もう一方のグループは、A系列の不可欠性を説く。

A系列からB系列への還元は、Mellorが主張するように、A系列の属性 (present, past, future) を含む文を、無時制の真理条件に置き換えることで

なされる。しかしこの還元の仕事に対しては、文とその真理条件とは別ものであるといった反論がある。

またわれわれの日常において果たしてB系列だけで事が足りるのかという深大な議論がある。Galeの持ち出した例である。たとえば、戦場において、敵が攻めてきたら敵が攻めてきたことを司令官に伝える見張り番がいたとしよう。<sup>(9)</sup> その見張り番が敵が攻めてきたのを見て、次のように言ったとする。

The enemy advances within 100 yards on December 12, 1996, at 4:01 p.m. E.S.T.

この場合、見張りはこの文を発する前にいわば暦時計 (calendar watch) とでもいうべきものを見なくてははいけないし、またこれを聞いた人も暦時計を見て照合しなくてはならない。そしてそんなことをやっている時間は、悲惨な結果を及ぼす、と Gale は言う。A系列の文は、それ独自の伝えるべき情報を含んでおり、A系列をB系列に還元して日常生活を行うことは困難である。

Gale はさらに、論理的考察から、両系列の優劣比較考察をしている。<sup>(10)</sup> 彼はまず、「ある」B系列が「特定の」A系列に還元できないことから、A系列の優位性を説く。なお、この場合のA系列は、Gale 自身によって拡張された「不純なA系列」である。下記(Ⅲ)において等号の右辺は選言の形をしている。

(Ⅲ)  $P$  is earlier than  $Q$  . $\equiv$ .  $P$  is past and  $Q$  is present or  $P$  is past and  $Q$  is future or  $P$  is present and  $Q$  is future or  $P$  is more past than  $Q$  or  $Q$  is more future than  $P$ .

(なお、 $P$ ,  $Q$  は出来事もしくは状況 state of affairs を示す)

また Gale は、B系列からA系列への還元において、その還元が不成功に終わるのは、還元先のA系列 ((Ⅲ) の右辺) のなかに、どうしてもB系列が入ってくることを指摘している。彼は右辺の最後の二つの選言肢については循環論的であるという。たとえば、 $P$  is more past than  $Q$  というのは、さらに、 $P$  is earlier than  $Q$  and  $Q$  is now past. と分析され、ここに再びB系列が登場してくるからだ。どうやってみても唯一A系列だけでB系列は説明できないのだ。このことは Gale によれば、われわれの時間概念が過去、現在、未来と

いう3つの分析不可能な概念に加えて、時間の構造が順序の概念を有していることを示している。<sup>(11)</sup>

逆に、このように(Ⅲ)は循環論的であっても、B系列文が5つの選言肢からなる選言と論理的同値になり、その選言肢一つ一つが二つの出来事のA系列の属性を示しているなら、これは、二つの出来事がそれぞれA系列の属性をもっていなければ、その二つの出来事間に、B系列関係が成り立たないということを示している。

こうして、いよいよA系列、B系列、どちらが優位なのかははっきりしなくなる。ただこうした優位づけだけにこだわると忘れてしまいがちになるのが、そもそもこの還元の試みは、時制とは、われわれの側にのみあるのか(A系列からB系列への還元が成功した場合)、出来事自体が有している属性なのかを見定める試みであるということだ。そして、いま考察したかぎりでは、A系列からB系列への還元、およびB系列からA系列への還元は完全に成功したとは言い難いように思われる。

#### 4. 小説における、問題のあらわれ—Graham Swift's *Waterland*

1996年に、*Last Order*によって英国で最大の権威をもつ文学賞である、ブッカー賞を受賞し、現代英国を代表する作家とされている Graham Swift (1949-) の代表作 *Waterland* (1983) でも、まず時制に関連した考察がなされる。主人公の歴史教師 Tom Crick が次のように問う。

But what is this much-adduced Here and Now? What is this indefinable zone between what is past and what is to come; this free and airy present tense in which we are always longing to take flight into the boundless future?<sup>(12)</sup>

拙訳：しかしこのさんざん引用された、「ここ、いま」とはなんであろうか？ 過ぎ去ったものとこれからやってくるものとの間にある、この定義できない区域はなんだろうか？ この自由で非現実的な現在時制。現在時制において、われわれは常に果てしない未来へ逃げ出すことを願っているのだ。

実はこのA系列によって構成される世界への主人公のこだわりはこの小説の大きなテーマとなっている。この引用箇所には、現在という不確かな地点について、「開かれた」未来への憧れつつ、自己の経験が出来事として歴史化すること（B系列化すること）を恐れている主人公の心理が読み取れる。小説のなかで彼は、自分の兄の死（自殺）をすでに経験していて、兄が既に「歴史」のなかに組み入れられたことを感じている。

Tomはグラマースクールの歴史の教師であるが、彼は妻の不祥事から今、その職を去らうとしている。彼の仕事の対象であった「歴史」とは何であるかを改めて考察すべく、生徒達の前で自分の祖先の歴史を語る。一般に「歴史」は、過去の出来事自体が固定されているばかりでなく、それぞれの出来事から見た未来が決まっているB系列世界あるいは宿命論的世界である。そこには出来事群の順序しかない。

自分が経験していない過去の出来事は、過去の資格を与えられているものの、それを語る者はそれを経験した感覚がないため、それとおとぎ話との相違を見い出せない。過去の出来事の実在性に対する主人公の疑問が生まれる。

Cockburnも論じているように、B系列による過去把握は、その把握している人から独立した、non-perspectivalな客観的描写であり、把握する者がそれを経験したかどうかは問題とならないため、過去の出来事の実在感覚を得るには、適しているかのように一見思われる。<sup>(13)</sup>ところが実在感覚は、無時制描写では得られないのだ。たとえば、この小説 *Waterland* の前半部分にある描写を考察してみよう。

But much will happen to Henry Crick. He recovers. He meets his future wife—there indeed is another story. In 1922 he marries. And in the same year Ernest Atkinson brings indirect influence to bear on his future employment. Indirect because the Atkinson word is no longer law; the Atkinson empire, like many another empire, is in decline, and since before the war, when he sold most of his share in the Leem Navigation, Ernest Atkinson has been living like a recluse, and some would say a mad one at that. But in 1922 my father is appointed keeper of the New Atkinson Lock.<sup>(13)</sup>

拙訳：しかしたくさんのことが Henry Crick にそれから起こるのだ。彼は回

復する。彼は将来の妻に逢うことになる—それは実際別の話であるが。1922年に彼は結婚する。そして同じ年に Ernest Atkinson が Henry の将来の仕事に間接的な影響を与えることをおこす。間接的であるというのは、もはや Atkinson の言葉は掟ではないからだ。Atkinson 帝国は、他の多くの帝国と同様衰退の状態にある。そして、彼が Leem 川船舶にもっていたほとんどの株を売った戦争以降、彼はずっと隠遁者のような暮らしをしており、それに加えて彼は頭がおかしいと言う者すらいる。しかし、1922年、私の父 (=Henry Crick) は、新 Atkinson 水門の門番に任じられる。

特に出来事の前後関係を説明するにあたって A 系列的、時制的表現—future, sold (過去時制)—が見られるものの、引用箇所中のほとんどの文が無時制で書かれている。そして出来事の羅列が箇条書のような印象を与える。

そこで彼は先祖の歴史とともに、今度は自分の人生のこれまでの出来事の描写もしてみようとする。そして、その過程においてそれが実際にあった出来事だという出来事の実在の感覚を得たいと思う。

出来事が有すると時制論では考えられる過去という属性は、非感覚的なものであり、過ぎ去った出来事から実在感覚を得ようとするのは、土台無理があるとは言える。しかし、なんらかの形の実在感覚が得られないならば、Tom は自分がこれまで存在したことにも懐疑の目を向けなければならなくなる。ちょうど彼は、それまで外界に向けていた懐疑をしばし自分に向けているのである。

さて、自分のこれまで経験した出来事群の描写をさきの、先祖の歴史で行ったように B 系列的描写で行えば、さして先ほどの大文字の歴史と差異が生じず、実在したという感覚は得られない。しかし振り返ってみれば、この小説の舞台であり、ほとんど出来事というような出来事は起こらない、英国南東部の土地 The Fens で生まれ育った彼にも、「ここ、いま」の実在感覚を与えてくれた特異な経験があった。<sup>(15)</sup> それは自分に初めてこの上ない喜びをあたえてくれた恋人 Mary との性の営み、そして、彼の友達が川から死体として引き上げられるのを目撃する場面である。

自分が経験していない過去の出来事とは違い、自分自身が経験する出来事に関しては、A 系列的感覚、すなわち、それが今起こっているという感覚を少なくとも出来事発生時に、われわれはもつはずだ。David Mellor は、われわれの経験というものがあるが必然的に現在であり、他の時制はそこから導かれることを論じている。

Temporal presence seems to be an essential aspect of all experience. By 'essential' I mean essential to its being experience. If I only gave the dates of my experiences, without saying which was happening to me now, I should on the face of it leave out precisely what makes them experiences....

Our knowledge of tenses comes entirely from the presence of experience. Experiences tell us directly of their presence, and the rest of the A series we fill in from there.<sup>(16)</sup>

ただ、われわれは出来事の経験のA系列的時間相、すなわち現在性を常に意識化するとは限らない。Mellorはわれわれが苦痛のない状態の経験を意識することが少なく、それでも問題のないことを指摘している。

I need not be making judgements all the time about every aspect of my experience. In particular, although I can hardly be *in* pain without noticing it, I can quite easily be free of pain without noticing it. Being free of pain does not force me to make the conscious judgment 'I am free of pain', even if I am—perhaps—bound to be right if I do so.<sup>(17)</sup>

さらに生活が規則化され、ほぼ毎日起こる出来事が決まっている日々も多い。その意味で、この現在感覚は頻繁に、経験とともにわれわれの意識にやってくるわけではない。そしてその感覚を与えた当の出来事はひとたびやってくれば即、現在の領域から過去の領域に推移していき、不動の過去の出来事と化す。Tomはこれに関連して以下のように述べている。

And so often it is precisely these surprise attacks of the Here and Now which, far from launching us into the present tense, which they do, it is true, for a brief and giddy interval, announce that time has taken us prisoner.<sup>(18)</sup>

拙訳：そして非常にしばしば、まさにこうした「ここ、いま」の急襲は、われわれを現在時制の区域へほうり投げることなど決してせず、もっとも、確かにほんの束の間、めまいをもよおすような間、現在時制のなかへほうりだすけれ

ども、しかし、「ここ、いま」が突然襲ってきて宣言するものは、時間がわれわれを囚人にしたということなのだ。

現在から過去へ出来事が推移して初めて、われわれはそれに判断を下せるようになる。出来事の経験と、その出来事についての判断とは別ものである。その後、判断を下すために想起する場合、出来事はすべて、想起する者の意識の「現在」に判断の対象として立ち現われる。「現在」にしか過去は存在しないという説は、遠い昔、アウグスティヌスも論じていたことだ。しかしこの段階では過ぎ去った出来事はまだ他の出来事群とのあいだでB系列を構成していない。

Tomの友人Freddie Parrの死は事故死ではなく、他殺であったことが死体を川から引き上げたときにわかる。そのときこそ、Tomに戦慄の走った瞬間であった。Tomは今、30年前の、このときのことを生徒達に語る。

祖先の歴史を描写する際と同様に、Tomはこの日の経験を、過去時制の文を連ねることで描写する。それがいよいよ緊迫する場面となると文が現在時制を中心としたもの（未来時制、過去時制も含む、A系列の文）に代わり、読者はその当時のTomの状況に直接、置かれている印象を持つ。

And I too am praying and hoping—I do not know if it is for Freddie Parr's sake or for my father's—that Freddie Parr will miraculously revive. Because it seems to me that in his futile pumping at Freddie's body, Dad is trying to pump away not just this added curse, but all the ill luck of his life: the luck that took away, six years ago, his wife; the ill luck that had his first born a freak, a potato-head (for that's what Dick is). And more curses, more curses perhaps, as yet unknown.<sup>(19)</sup>

拙訳：私も祈って願っている——それが死んだFreddie Parrのためなのか、自分の父のためなのかは知らないが——Freddie Parrが奇跡的に生き返ることを。なぜなら、私には、父がFreddieの体から、甲斐なく水をくみ出そうとしながら、父はこの新たな呪いだけではなく、自分の人生に振りかかっているあらゆる呪いをくみ出そうとしているように私には思えるからだ。それは、6年前、自分の妻を奪った不運。最初の子が奇形の子、ばか（というのはまさにそれに他ならないのだ）として生まれてしまった不運。そしてまだ知られざるもっともっと多くの呪いである。

しかし、こうしたA系列の文の使用は、やがてまた過去形のみ使用（B系列の文）に戻る。

友人の死体と遭遇し、それが他殺であると思えた時から、Tomはまだわからないその殺人の経緯をたどろうとする。殺人の因果関係をたどる過程は、過ぎ去った出来事群のあいだにB系列を作る試みである。やがて、誰が犯人であり、どういう経緯でその殺人が起こったかは、ほぼ完全なまでに明らかになる。

ところがその経緯が完全にわかったときに、この殺人に関連する一連の出来事は、「歴史」のなかに組み入れられてしまう。殺人犯は自分の兄 Dick であった。やがてその兄は川に飛び込み自殺する。そして兄の愛用していたバイクが川岸に残されているというのがこの小説の終わりの部分である。作家の意図はバイクという「もの」の事実と、過去に推移した出来事（「こと」）の事実とを対照化させることで、この殺人事件の实在感覚が得られなくなったことを強烈に描いている。なお、以下この小説最後の文には動詞がない。

On the bank in the thickening dusk, in the will-o'-the-wisp dusk, abandoned but vigilant, a motor-cycle.<sup>(20)</sup>

拙訳：深まりいくたそがれ、鬼火も出るようなたそがれの川岸に、放置されつつもこちらを見張っているモーターバイク。

もはや自己の経験上の出来事も、他の歴史的出来事と同様その实在性を確認できないものと考えざるを得ない。それは今、30年を経てこのようにそれを想起しても同じである。

したがってTomがこの小説で主張する「いま」の感覚は、前後の出来事と切り離された単一の出来事が与えてくれるものである。この意味における「現在」というのは、いわば剃刀の歯のように幅がなく、その先が見えない「現在」であり、またそれ以前の出来事の延長線上にも位置づけられない「現在」である。<sup>(21)</sup>

ここでなぜ当時のTomが事件の因果関係の説明に走ろうとしたかについて次のようにも考えられる。誰かに殴られた跡のある、友人の死体を目撃するという恐ろしい出来事にTomは接して、その当時、その出来事の強烈な生の实在感覚をTomは和らげなかった。生まれつき、非常に繊細な性格のTomは

この事件の背後に潜む、人の悪を理解できなかった、あるいは理解しなくなかったことは事実である。

出来事群の因果関係を考える過程において、われわれが失うのが出来事の実在感覚である。一つの出来事はその前後の出来事との因果関係を与えられない限りは、それが過去の領域に移行するにせよ、ある種の不可解性を維持し、もとの実在性を維持しながら、亡霊のようにわれわれの現在につきまとう。その亡霊を退治しようというのが当時の Tom の反応だったし、それは Tom の実在に対する拒否反応である。実は Graham Swift の小説においては、実在へのあこがれのみならず、実在からの逃避が主人公達の心理に見られる。したがって Tom が、因果関係を突き止めて事件の経緯を理解して、友人の死を目撃するという出来事の実在感覚をなくしたのは、自己の防衛反応のあらわれと見ることができる。ただ、こうして故意に失った実在感覚は二度と戻ってこない。その理由を先の Gale の分析に沿って考えて見よう。

(Ⅲ)において、われわれは、二つの出来事間の B 系列関係を、特定の A 系列関係に還元することができないことをみた。ということは、(Ⅲ)の右辺の5つの選言肢のどれに還元してもよいということになる。

過去の経験時において実在感覚を与えてくれた出来事を仮に  $E_2$  としてみても、 $E_2$  に、B 系列上で先行する任意の出来事  $E_1$  を選んで、 $E_1$  is earlier than  $E_2$ . という B 系列の文をつくってみる。それから、 $E_1 = \text{past}$ ,  $E_2 = \text{present}$  としてみてもこれを A 系列に還元する。そうすれば出来事を現在の領域に連れ戻すことで、その実在感覚も再度経験できるのではないかと一瞬われわれは考えてしまう。そして、もしそうならば出来事の実在感覚が、時制によって回復できることになり、ひいては時制というものが出来事の側にあることの証明にもなる。具体的には、

$E_1 = \text{Dick が Freddie をうらみ始める}$

$E_2 = \text{Freddie の死体を目撃する}$

しかし頭のなかで何度そのような還元作業を行って、 $E_2$  に「現在」を割り当てても、あの実在感覚は生じてこない。なぜだろうか？ 出来事がひとつたび、過去の領域へ推移し、B 系列の他の出来事群のなかに配列されていく際に、失われていく何かがあるはずだ。

筆者が先にあげた「新しいA系列」においては、未来が未定である（多少の未来把持は除く）とした。過去の二つの出来事群  $E_1$ ,  $E_2$  のB系列を考えて、それをA系列に還元してみる際、実は、 $E_1$  is past,  $E_2$  is present. ということにとどまらず、 $E_3$  is future. と言える、その問題の出来事  $E_2$  の後にB系列の上で並ぶ出来事  $E_3$  が、もはや一つは存在しているのである。たとえば「 $E_3$  = 凶器として使われたと思われるビール瓶が Dick のものだと判明する。」などでもよい。この  $E_3$  という出来事が控えていないとき、すなわち、B系列上で  $E_2$  の後の出来事が決まっていないうとき、われわれは出来事に対して実在の感覚（「いま」の感覚）をもつのではあるまいか。

したがって未来が決まっていないう状態はわれわれが現在の感覚をもつのに際して非常に大きな役割を担っているわけである。出来事  $E_1$  にしても、これは事件の因果関係の説明がついたときに得られた情報であり、 $E_2$  の経験の際には、まだ認識されていないう出来事である。 $E_2$  はそういうわけで、 $E_2$  の前後の出来事から切り離されたものとして主人公を襲ったのだ。こうしてみると、経験の実在感覚は経験する主体の、その経験時の、その経験を取り巻く状況に対する無知に由来すると言えそうである。これは、出来事群をふ瞰するB系列と比較すれば、A系列中の「現在」の領域は、主体の認識の限界を示しているのだ、と言われることにも通じる。

## むすび

*Waterland* からの引用で示されていた、果てしない未来への主人公の憧れは、自分に現在感覚を与えてくれた経験、出来事から、その実在感覚を得られなくなることに對して、何もすることもできないという嘆きである。<sup>(22)</sup> 友人の他殺された死体を目撃するというような、普通に考えれば二度と思い出したくないような出来事に、Tom が実在感覚をもつことができた出来事として、唯一、高い重要性を与えているのは、彼が遭遇するそれ以外の出来事がほとんどすべて、因果の説明がその発生以前から容易に理解できる出来事ばかりであるという証しである。

そのような状況では、主人公にとって「現在」をつかまえることは困難である。彼の立場は、あらゆる出来事の上をふ瞰しながら見渡せる、無時制論者の立場に極めて近いものになるからである。

主人公は、無時制の表現による過去の出来事の描写を捨て、時制を用いた表

現によって過去に推移したその出来事の実在感覚を取り戻そうとする。しかしそれが成功するのは、ある限れた時点、まだ出来事の因果関係が彼に不明の時点においてであり、彼が因果関係と切り離された「現在」そのものと遭遇している時である。しかしその時は決して長くは続かない。

それは、因果関係の中に出来事を整然と組み入れる（歴史のなかに出来事を組み入れる）という人間の、本能に根差した営みがあるからだ。<sup>(23)</sup> 出来事に対してわれわれがもちうる実在感覚はその営みのなかで奪われていく。それは特に、出来事の衝撃がわれわれにとって強すぎるような場合は、その衝撃からわれわれが逃れる防衛反応として有利に働くが、一方でこの小説の主人公 Tom が抱いたように、過去の出来事が本当にあった出来事なのかどうかという懷疑を生み出すことにつながる。

Tom がA系列的世界を、疑いつつ憧れていた心の揺れは、このように、「無時制論」対「時制論」の論争につながっていく側面を有しているように思われる。

#### 注

(1) McTaggart は時間の非実在性について、他の論法でも主張している。

(2) [Cockburn] p.229.

(3) [中島] p.138.

(4) [Mellor] p.100.

(5) [Gale] p.93.

(6) もっとも、B系列はそうした付された年月日から導きだされるかと問えば、必ずしもそうでない。年月日の付されていない、もしくはわからない出来事どうしの間には、因果関係の点から前後をあてがう。

(7) Cockburn は、われわれが「現在(いま)」を共有できるのに対して、場所におけるこの「現在」の概念に対応する概念である「ここ」をわれわれが共有できないことが、時間と空間の大きな相違であると主張する。[Cockburn] p.92.

(8) このとき逆方向の還元が不可能であることを彼らはあまり問題にしていない印象を受けた。

(9) [Gale] p.58.

(10) [Gale] p.92.

(11) [Gale] p.99.

(12) [Swift] p.60. Swiftの小説からの引用についてのみ、この論文では、参考のために訳を付けた。

(13) [Cockburn] pp.72-96. Chapter 5 entitled “The Role of Tense.”

(14) [Swift] p.20.

(15) なお、今回のこの論文では、空間について、すなわち、「ここ」についての考察を避ける。

(16) [Mellor] p.49.

(17) [Mellor] p.52.

(18) [Swift] p.61.

(19) [Swift] p.32.

(20) [Swift] p.358.

(21) したがって、この「現在」は、William Jamesの言う、“the specious present”のような幅をもった「現在」とは異なるものである。

(22) またこの作家の処女作 *The Sweet-shop Owner* (1980) においては、すでに決まっている「完璧な」未来に対する嫌悪感と抵抗が見事なまでに描かれている。主人公は人生最後の日、学生時代の徒競走を想起する。想起した徒競走のなかに主人公は身をおく。すでにゴールを自分が切ることも、また一緒に走っている仲間が大人になってからの出来事までも脳裏に浮かぶ。過去の出来事の想起にくっ付いているこの決定ずみの未来に接して、主人公はもう一度この決定をくつがえすべく、この想起のなかでそこで白紙の未来を想像し、走っていることの実在感覚を獲得しようとする。そしてこの試みは、小説の最後で主人公が自殺を決意し、空白の未来へ飛び込むことで完成に至る。つまり彼は死によって実在を失うどころか、逆に、死に飛び込む、ぎりぎりの瞬間に自分の生の最高の実在感を獲得できると考えるのである。この小説は、“All right--now.”で終わっている。

(23) Swiftは次のように *Waterland* の中で書いている。“Children, only animals live entirely in the Here and Now. Only nature knows neither memory nor history. But man—let me offer you a definition—is the story-telling animal. Wherever he goes he wants to leave behind not a chaotic wake, not an empty space, but the comforting marker-buoys and trail-signs of stories.” [Swift], pp.62-62.

拙訳：『みんな、動物だけが完全に、ここそしていまに生きているんだよ。記憶も歴史も知らないのは自然だけだ。しかし人間は、そうだ、人間の定義を一つ出そう、人間は

話をする動物だということだ。人がどこへ行っても後に残したいのは、混沌とした航跡でも、なにもない空間でもなく、安堵の気持ちを与えてくれ、目印として使えるブイや通った跡を示すものとなる、いろいろな話なのだ。】

#### 参考文献

Cockburn, David (1997). *Other Times*. Cambridge University Press

Swift, Graham (1983). *Waterland*. Vintage International

Mellor, David (1981). *Real Time*. Cambridge University Press

Gale, Richard M. (1968). *The Language of Time*. Routledge & Kegan Paul

中島義道 (1996). 『時間を哲学する』講談社現代新書

(山口大学経済学部)